

「合唱団の母」一冊に

安田祥子、由紀さおり…育てた

戦後の日本を歌声で元気づけた名門「ひばり児童合唱団」の創設者・皆川和子さんの一生をたどる「太陽がくれた歌声」ひばり児童合唱団物語・皆川和子の生涯(主婦と生活社)が出版された。執筆したのは、和子さんの甥で、合唱団を引き継いだおさむさん(52)。おさむさんは「『歌は人々の心を豊かにする』というおばの思いを継いでいきたい」と話している。



定期演奏会に向けて練習する団員ら

甥のおさむさんが執筆

* 「ひばり」創設の皆川和子さん

和子さんは1922年に新宿区で生まれた。音楽学校に通い、一度は歌手デビューしたが、のどの手術などで活動の継続を断念。43年から近所の子供たちに歌を教え始め、46年に天高くさえずるひばりをイメージしてひばり児童合唱団と名付けた。

64年の東京五輪では、かすりの着物に赤い帯のかわいらしい姿で童謡を歌い、各国の選手に喜ばれた。本では、合唱団の戦後の活躍と和子さんの熱血指導ぶりが紹介されている。

54年公開の映画「二十四の瞳」では、団員が子供の歌声の吹き替えを担当。監督が和子さんに「次のシーンでは、わりと下手な子を



選んでください」と頼むと、「下手な子はいません」と応じたという。また、生放送出演で団員が授業を休む際には一人ずつ手紙を書いて学校に持たせた。

合唱団は歌手の安田祥子さん、由紀さおりさんらを輩出し、女優吉永小百合さんとも共演した。本の帯には吉永さんが「皆川先生の子供達へのやさしさと情熱。いつまでも私の心に残ります」と自筆のメッセージを寄せている。

おさむさん自身も3歳で入団。「黒ネコのタンゴ」でデビューし、大ヒットとなった。合唱団にすべてをささげたおばの人生を振り返り、あとがきに「限りない子供の可能性を信じて、3000人以上もの子供を愛し、愛された」と記した。

和子さんは昨年8月に92歳で亡くなった。現在は、小学生から高校生までの約30人がレッスンに励み、6日は定期演奏会を開く。約20の合唱曲を披露する。

演奏会は午後4時半から、中央区の浜離宮朝日ホールで。3000円。問い合わせは同合唱団(03・3712・2653)へ。本は1冊1389円(税別)。

「童謡を歌い継いでいきたい」と話すおさむさん